

## 小さなNPOの“一隅を照らす”活動

～NPO法人ミュージアム研究会～



NPO法人ミュージアム研究会 清水 麻記(理事)・江藤 信一(理事)

ミュージアム(博物館・水族館・動物園・美術館など)は、年齢・性別・宗教・価値観・国籍を越えて様々な人々が集まり、交流し、学び、遊ぶことができる場です。NPO法人ミュージアム研究会は、日本の、そして世界のミュージアムの楽しさを共有し、情報発信し、実践していくという理念のもと、2009年3月に誕生しました。大きな柱としては、地球の宝を残していく場所としての「博物館教育」と、私たちの宝である地球や環境を大切にしていく「環境教育」の2つをミッションとして掲げています。

社会の未だに満たされないニーズに応えようとする“社会起業家(ソーシャル・アントレプレナー)”という言葉が、最近よく耳にします。私たちのNPOも、その理念に共感しつつ、社会のニーズに応えるべく活動を続けて4年目になります。大学発のソーシャルベンチャーとして発足し、常勤職員は設けず、それぞれの可能な範囲で活動・協力を行なっております。NPO法人ミュージアム研究会という小舟に乗った約10～15名程度の会員一人ひとりが自分のもつ能力を発揮し、全員の力を集結させ、NPOとして社会に貢献しています。

「一隅を照らす それ即ち国宝なり」という最澄の言葉にあるように、どんなに小さな組織でも、その場所で精一杯の活動をする、そんなNPOを目指しています。本稿では、これまでの各事業の紹介を通して、日本の一つの小さなNPOの活動を知っていただけの機会になればと思います。

### 1 「国際博物館の日新聞」

5月18日は、1977年にユネスコで制定された「国際博物館の日」です。

2008年5月18日に、NPO法人ミュージアム研究会の前身であるミュージアム研究会で「国際博物館の日新聞」を創刊し、2009年よりNPO法人ミュージアム研究会(以下ミュー研)のウェブサイトに掲載するとともに、毎年1,000部を無料で配布しています。ユネスコで決められる、その年の「国際博物館の日」のテーマに沿って、博物館に関する記事や4コマ漫画を募集し、博物館の楽しさを共有できる紙面を心がけてきました。執筆者は、国籍、職歴、経歴を問わず、様々な方々に依頼し、それに対して皆さん、快く記事を執筆してくださっています。これまでの「国際博物館の日新聞」の記事は、ウェブサイトに掲載されていますので、ぜひご覧ください。(写真1)(<http://www.museum-lab.net/>)



写真1 国際博物館の日新聞発行

## 2 巡回展「クジラとぼくらの物語」

平成21年度は、日本財団の助成金をいただき、「回遊展クジラとぼくらの物語」を展開しました。2009年に「クジラ」や「サンゴ」に関する宅配便で輸送できるコンパクトな巡回展コンテンツを開発し、8月から翌年3月まで全国巡回させました。NPO設立前から活動として取り組んでいた「クジラ」をテーマに、中立の立場から科学・文化・歴史など様々な角度から学べる展示を開発・巡回させていたため、その展示テーマを引き継ぐと同時に、クジラが赤ちゃんを産みに帰ってくるふるさとの海「サンゴ礁」も新しい展示テーマとして加えました。通常、宅配便サイズの貸出用展示キットでは、スーツケースなどの鞆型が定番ですが、ミュ研では茶箱(写真2)や蚊帳の活用を試みました。かつては、暮らしの中に当然のように存在していたモノで、時代の流れとともに失われつつあるモノに触れる機会になればという思いを



写真2 お茶箱を外箱として活用し開発



写真3 蚊帳を活用した展示

込めています。

また蚊帳については、サンゴ礁を表現するための舞台として展示に取り入れました(写真3)。青い蚊帳の中に入ると、涼しげでまるで海の中にいるようです。小さな子どもも大人も、蚊帳の中に入ると安心して落ち着くようでした。宅配便サイズの巡回展は、運送費も低コストで設営も容易なことから、地域のミュージアムなどからの貸出ニーズが高く、初年度の巡回展開催は全国10か所177日間で55,043人の入場者数を記録しました(表1)。こうした日本文化を表すアイテムを展示に取り入れることによって、三世代の会話が展示会場で引き出されるきっかけをつくることができました。

## 3 巡回展に伴うソフトプログラム

(コミュニケーター養成・紙芝居プログラム・サイエンスカフェ)

展示を来館者の学びに結び付けていくためには、ハードである展示を掘り下げていくソフトプログラムが欠かせません。クジラ展では、地元の中学生・専門高校生・お母さん・ボランティアの方々に展示と来館者を結ぶコミュニケーターになってもらう養成講座も提供しました。これは、巡回展示が終了し、次の開催地に展示が移ったとしても、展示を通して届けられたものが巡回先に残っていくことを意図したものでした。

また、地元のクジラに関する話を掘り起こし、オリジナルの紙芝居として具現化・アーカイブしました。巡回先で作品化したクジラにまつわる紙芝居は、現在8作品にも及んでいます(表2、写真4)。さらに特別版では、地元の子供たちと一緒にオリジナルの歌も作り、現在でも地域のイベントなどで歌ってくれているとのことでした。こうした活動は、地元の人々にとって「自分たちの地域にクジラに関するこんなお話があったのか」と地域再発見をするきっかけにもなります。次の巡回先にとっては、全国の他の土地のクジラ物語に触れることができます。

表1 2009年度 回遊展「クジラとぼくらの物語」実施状況

	開催地	会期	入場者数
1	阿嘉島港ターミナル（沖縄）	2009年7/28～9/10（45日間）	4,527人
2	太地町立くじらの博物館（和歌山）	2009年8/1～8/20（20日間）	28,240人
3	横浜開国博（神奈川）	2009年8/26～9/7（13日間）	9,000人
4	鯨展（東京）	2009年9/26（1日間）	90人
5	紀伊國屋福岡本店（福岡）	2009年10/1～10/9（9日間）	318人
6	福岡市立少年科学文化会館（福岡）	2009年11/16～11/30（15日間）	1,630人
7	山梨県立科学館（山梨）	2009年12/19～12/27(9日間)	1,847人
8	船の科学館（東京）	2010年1/10～1/24(15日間)	5,107人
9	久留米多目的ギャラリー（福岡）	2010年2/10～2/21（12日間）	402人
10	沖縄県立博物館・美術館（沖縄）	2010年2/5～3/14（38日間）	3,882人
計	10か所	延べ177日間	55,043人

表2 クジラ展オリジナルの紙芝居シリーズ

	表紙	タイトル	作成地	作成者・参加者
紙芝居 シリーズ1		奈多のクジラ学校	福岡	文：鳥巢京一 絵指導：菅 瞭三 絵：NPO法人子ども文化コミュニティの子どもたち
紙芝居 シリーズ2		クジラ橋	大阪	文・絵：OCA大阪コミュニケーションアート専門学校
紙芝居 シリーズ3		ジョン万次郎	和歌山	文：中濱京、北代淳二 絵指導：奥 春香 文編集：櫻井敬人、清水麻記、太地町立太地小学校のみなさん
紙芝居 シリーズ4		リヤカーのクジラ売り	福岡	文：鳥巢京一 絵：西本千春・西南学院大学と九大Little Handsのコミュニケーター
紙芝居 シリーズ5		クジラのリンちゃん物語	沖縄	文：村田彰造 絵指導：さかみゆな 絵：座間味村の子どもたちとNPO法人ミュージアム研究会
紙芝居 シリーズ6		山の森 海の森	福岡	文：鳥巢京一 絵指導：尾崎眞吾 絵：クジラ展に参加した子どもたち
紙芝居 シリーズ7		いのちのトラベル～ムカシくん とイマちゃんの大冒険～	福岡	文：清水麻記・星クジラ恐竜チーム2009 絵：梶原忠裕・NPO法人ミュージアム研究会
紙芝居 シリーズ8		からくり儀右衛門ものがたり	福岡(久留米)	文：鳥巢京一 絵：村上清司・河野央 着彩：クジラ展に参加した子どもたち
歌 特別版		ぬちどつたから	沖縄	曲：平井真美子 歌詞：座間味村の子どもたちとNPO法人ミュージアム研究会



写真4 オリジナル紙芝居の完成



写真5 サイエンス・カフェの様子



写真6 かぎ編みサンゴ

また、クジラ展と並行して「クジラ」をテーマにしたサイエンス・カフェを開いてきましたが、最近では海、食育、科学...とテーマを広げて実施しています。NPOのメンバーに科学分野の専門家がいることも、活動の広がりにつながっています。このように社会のニーズに合わせたアウトプットも行える点は、小さなNPOの大きな利点ではないかと感じています。(写真5)

### 3 クジラからサンゴへ「クジラとサンゴの物語」

最近の活動から、私たちのような小さなNPOにとって、国内外の他のNPOや任意団体とのネットワークの中で共同ワークショップを開催することも非常に有効であると感じます。2009年には、かぎ編みで毛糸のサンゴを各地で作し、サンゴなどが織り成す双曲空間(hyperbolic space)に関するワークショップとかぎ編みサンゴ展示を続けている任意団体Institute for figuringのMargaret Wertheim 所長(サイエンス・ライター)を招聘するなど、かぎ編み愛好家の方々はじめ新しい参加者との交流も広がってきました。(写真6)

### 4 今後の活動

現在の活動は、「国際博物館の日新聞」を発行するとともに、他の館からの茶箱クジラ展の要望に沿って、年に2回ほどのペースで貸し出しを行っています(表3)。また借用館や博物館養成課程の学生に対してコミュニケーター養成講座も開催しています。多くの実物展示が充実している博物館側からは、特別展などの際にハンズオン展示まで手がまわらないところを補完できる展示コンテンツとして高い評価をいただいています。

また、わずかな予算で行えるサイエンス・カフェやワークショップなどの活動も、年に2回ほどのペースで実施しています。こうした継続的な活動ができるのも、他のNPOや私たちの活動に興味をもってくれる方々とのネットワークがあってこそです。

今後もそうした方々とのつながりを大切に、ノウハウを培ってきた茶箱クジラ展を大切に、長く運用していきたいと思っています。博物館教育と環境教育に軸を置き、それぞれのメンバーの立場で、知識や経験を持ち寄り、社会に還元する活動を長く続けていきたいと思っています。そのためには、内外のネットワークと他機関との協力が欠かせません。どうぞよろしくお願いいたします。

表3 2010年度～2011年度までの回遊展「クジラとぼくらの物語」実施状況

	開催地	会期	入場者数
1	国立科学博物館(東京) 「大哺乳類展-海のなかまたち-」協力展示	2010年8/1～8/3(3日間)	約9,000人
2	文教大学湘南キャンパス文化祭(神奈川) 博物館学芸員養成課程	2010年10/22～10/24(3日間)	約550人
3	富山市科学館(富山)	2011年8/26～9/7(13日間)	21,356人
4	福岡市博物館(福岡)	2011年10/9～10/10(2日間)	250人